

保幼小接続の観点による算数科教科書の比較分析

—— 領域と教育内容, 提示方法の違い ——

太田 直樹⁽¹⁾

本研究では, 保幼小接続の観点を踏まえて, 2024年度(令和5年検定済)の第1学年の算数科教科書を比較分析し, 教科としてのスタートカリキュラムの現状を明らかにし, 今後の在り方を検討することを目的とした。比較分析の結果, スタートカリキュラムで使用される算数科教科書は, 多くの場合学習内容が「数と計算」領域に限られていることが明らかとなった。また, 序章においては, ほぼすべての算数科教科書において, 幼児期の遊びや日常生活を想起させる写真や絵が掲載されており, スムーズな学びの接続を意図していることが見いだされた。しかし, 記載される遊びや日常生活の場面, 記載される領域数は, 出版社によって限られており, 小学校算数科のイメージを豊かにすることが望ましいとすれば, より多様な領域に触れる単元, より多様な遊びや日常生活の場面が記載される必要性が見いだされた。

キーワード: 算数科教科書, 保幼小接続, スタートカリキュラム, 幼児期の遊び

1. 研究の背景と目的

算数科教科書は, 我が国において, 教育カリキュラム上の重要な役割を担っている。我が国では, 学校教育法第34条により, 小・中・高等学校等の教科書について教科書検定制度がとられ, 算数科教科書を発行している出版社は, 2024年現在6社ある。文部科学省(2021)によれば, 教科書の検定の意義として, 「教科書検定制度は, 教科書の著作・編集を民間に委ねることにより, 著作者の創意工夫に期待するとともに, 検定を行うことにより, 適切な教科書を確保することをねらいとして設けられているものである。」とされている。この教科書検定制度は, 学習指導要領に則り, 一定の教育の質を保証している要因の1つと考えられる。実際, 教育到達度を国際的な尺度によって測定しているTIMSS(2019)の結果によると, 「教科の平均得点(標準化されており, 経年での比較が可能)については, 小学校・中学校いづれも, 算数・数学, 理科ともに, 引き続き高い水準を維持している。」と報告されている(国立教育政策研究所(2021))。

学習指導要領, および, その具体である算数科教科書は, 我が国の教育カリキュラムを支える土台であるといえる。ただし, 教育カリキュラムには, 多義性が含まれる。清水(2020)は, 学校数学カリキュラムにおいて, 目標・指導・評価が整合的かつ機能的に整列しているかを検証するためにTIMSSで使用された枠組みである「意図されたカリキュラム」・「実施されたカリキュラム」・「達成されたカリキュラム」の三層を提起している。算数科教科書は, 「意図されたカリキュラム」といえ, その記載内容を比較分析することは, 非常に重要な検討事項であろう(清水(2021))。また, 長崎ら(2015)は, 算数・数学教科書の研究について, 国際会議(ICMT2014)をもとに報告し, 教科書が真の知識で構成されるといった捉えだけでなく, 国際的には教科書が学習内容を思考する学習材としても捉えられていることを指摘している。

「意図されたカリキュラム」である算数科教科書は, 学習指導要領の変更に伴う大改訂と, 通常4年毎の小改訂がなされる。戦前は, 国定教科書として, 各教科

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科 e-mail: n-ohta@fcu.ac.jp

1 種類であったが、戦後より教科書検定制度がはじまり、現在は、6社の出版社が算数科教科書を発行している。教科書が改訂された際は、どのように学習指導要領の改訂と関連しているのか、どのような教育内容が扱われ、どのように子供たちに提示されているのかなどといった、改訂内容が自然と比較分析され着目される。矢野（2012）は、渡辺（2011）に提示された教科書研究の領域をもとに、以下のように整理している。

- ① 教科書の機能・使用法に関するもの
 - ② 教科書の記述内容に関するもの
 - ③ 教科書の歴史・変遷に関するもの
 - ④ 教科書の制度・基準に関するもの
 - ⑤ 教科書の体様に関するもの
 - ⑥ 外国の教科書に関するもの

そして、矢野（2012）は、これらの教科書研究の領域が、教育学部でみられてきた各講座や領域にほぼ合致するとし、教科書研究の分類は方法論の分類であるとしている。本研究は、②の記述内容に関する比較分析にあたる。

算数・数学科教科書の教科書分析では、岩崎・山口（2002）が教科書に現れる文を数学認識の言語表現であるとし、「述語」という観点から組織的に分析する方法を提案している。そして、平叙文の6種の分類に対する集計結果をもとに、系統的な変化や小学校・中学校間の学校種の違いを指摘している。また、統計教育といった特定の教育内容に対する算数・数学科教科書の比較分析もおこなわれており、統計的リテラシーに関する項目の記載割合が少ないことや社会的文脈の減少が指摘されている（槇・堀田（2016）、福田・紙本（2019））。

さて、2024年度（令和6年度）は、算数科教科書が小改訂されたが、4社の第1学年用の算数科教科書では、本体冊子とは別に、スタートカリキュラムの観点から編纂された別冊が発行された。それ以前の2020年度（令和2年度）用では、幼児期からのスタートカリキュラムを意識した記載があったが、第1学年用は、1冊のみの発行であった。別冊にすることで、算数科教科書を平らに開きやすく、数図ブロックなどが滑らずに置くことができることを意図している。

このような改訂の背景には、「小1プロブレム」等

の課題があり、幼稚園・保育所及び認定こども園と小学校との連携を一層強化すること、子どもの育ちや学びの連続性を確保することが求められてきたことにある。国立教育政策研究所（2019）は、スタートカリキュラムの定義として、「小学校へ入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムです。」としている。そこでは、幼児期に育まれてきた学びの芽生えを、児童期の自覚的な学びに繋げることが提起されている。幼児期の教育の特質としては、「環境を通して行う教育」があげられ、教科ごとに分科した学びではなく、遊びや生活を通して総合的に学んでいく。しかし、北野（2009）は、「保幼小連携は、多くの地域で進められつつあるが、その大半がイベント中心である」と、2009年頃の保幼小連携の現状の課題を指摘し、子ども間や教員間の人的交流、幼稚園幼児指導要録や各園各校の通信などの情報の交流などで停滞するのではなく、系統的な教育課程や方法論に関する実践的な研究の必要性を指摘している。

次に、学びの接続を検討するために、幼児期の数・量・形の発達について検討する。榊原（2006, 2014）は、東京都・神奈川県私立幼稚園（累計13園）を対象に、保育活動の自然観察調査を実施することで、数量活動の種類と頻度、およびそのような活動における教師の支援の具体的な方法について検討している。その結果、数量活動を含む保育活動が、多くの日課活動と設定活動といった日常生活や遊びの中にみられることを明らかにしている。例えば、出欠の人数確認や日付、数え歌、制作活動での形や量の指示、大きさや形を身体表現するなどの保育活動の中に、数量活動が含まれている。また、小谷（2005）は、日常の保育活動にみられる量に関する言葉を用いた場面の事例を基に、量の捉え方、言葉の表現方法、交友関係による発達という3つの観点から考察している。その結果、量の認識を高めるのに、交友関係による共感や物体の比較、目的意識のある伝達が強く影響していることを明らかにしている。

以上のように、数・量・形の認識の発達については、幼児期に行われている日常生活や遊びが寄与している。重要なのは、小学校第1学年から、算数・数学の学びがスタートするのではなく、乳児期・幼児期から

の育ちの上に、児童期があると捉えることである（山内ら（1998））。「子ども達は小学校から学び始める」といった誤った認識を教員がもっている結果、これまでできていたことさえ、できなくなるといった現象を見聞きする。第1学年の児童が、第6学年の児童とペアを組み安心して学校生活が送れるようにすることは大切であるが、これまで最年長として自立して活動してきた経験をもとに、小学校の学びを積み上げていくことが望ましいだろう。

以上のように、第1学年用の算数教科書は、近年スタートカリキュラムを意識し、別冊として発行している出版社がある。それらの算数教科書は、どのような内容で構成されているのか現状を把握し、保幼小連携の観点から、より望ましい算数教科書の在り方を検討することは重要な意義がある。これまで、第1学年で扱われていた内容をそのまま別冊としているとすれば、保幼小接続の観点からみれば、より一層の改善が望まれる。そこで、本研究では、保幼小接続の観点を踏まえて、第1学年の算数教科書を比較分析し、教科としてのスタートカリキュラムの現状を明らかにし、今後の在り方を検討することを目的とする。

2. 算数教科書の分析枠組み

2-1 分析対象

分析対象は、算数教科書を発行しているA～Fの6社の令和5年（2023年）検定済み算数教科書第1学年用とする。ただし、A～Dの4社の出版社は、第1学年用の算数教科書をスタートカリキュラム用として別冊にして発行している。なお、E社、F社の出版社は、別冊としてスタートカリキュラム用の算数教科書を発行していないため、上記4社と同様の単元名の範囲を分析対象とした。各社の順は、別冊のある出版社とない出版社の2区分に分けた上で、50音順にA啓林館、B東京書籍、C大日本図書、D日本文教出版、E教育出版、F学校図書とした^(備)。

2-2 分析方法

分析方法は、大きく3観点とした。まず第1に、量的な観点として、①掲載されている領域数、②単元名、③各単元のページ数とした。領域数は、平成29年告示の小学校学習指導要領算数編の「数と計算」「図形」「測定・変化と関係」「データの活用」の4分類とし、

扱われている単元を計数した。各単元のページ数は、練習問題のページも含むこととし、次の単元への準備のページは、次の単元のページとして計数した。なお、本分析対象の算数教科書では、単元①の前に、「わくわく すたあと」「なかよし」などの題名を冠した序章が記載されている。それらは、序章として、単元1と分けることとした。

第2の観点は、質的な観点として、①幼児期の遊びとの結びつき、②日常生活との結びつきとした。分析対象となるページは序章であり、これらの観点に対して、該当のページが確認できない際は「－」を、1ページの掲載が確認される際は「○」を、2ページ以上確認される際は「◎」と表記する。さらに、掲載されている具体的な遊びや日常生活場面の有無を「○」「－」で表記する。なお、幼児期の遊びや幼児期までの日常生活との結びつきに関しては、有無の判定に客観性を担保させるため、幼児教育学を専門とする研究者とともに協議し確認をおこなった。

3. 分析結果

3-1 領域数、単元名とページ数による比較分析結果

まず、表1は、各社の扱っている領域数、単元名と単元のページ数についての計数結果である。領域数については、序章の扱いの記載を除き、ナンバリングされている単元を計数した。領域数は、多くの場合「数と計算」領域のみの1領域であった。A社とE社が2領域であり、A社は「図形」領域（いろいろな かたち）、E社は「測定」領域（いま なんじ）が掲載されている。序章の記載は、順に8, 2, 6, 14, 5, 0ページ記載され、出版社によって散らばりが大きく（標準偏差 ≈ 4.49 ）、A社～E社までの5社に記載されている。最も多いのは、D社の14ページであり、幼児期の遊びを思い出している物語となっている。また、「数と計算」「図形」「測定」領域に見開き2ページずつ記載されている。次に、多いのはA社の8ページである。「わくわく すたあと」の見開き2ページにおいて、幼児期の遊びの様子が写真で掲載され、D社同様に、3領域の内容が記載されている。C社の序章「なかよし」は、6ページに渡って、「数と計算」領域の10までの計数、1対1対応の考え方が扱われており、「図形」や「測定」領域は扱われていない。

次に、扱われている単元は、出版社によって表現

の違いがあるが、共通して10までの数の計数や数唱、数字の表記、順序数、数の合成・分解が扱われている。B社を除き、単元①「10までの数」は10～22ページ、単元②「なんばんめ」は4～6ページ、単元③「いくつといくつ」は8～14ページとなっている。B社については、「①なかまづくりと かず」の単元において、他社が10までの数と数の合成・分解の教育内容を2つの単元に分けているのに対し、1つの単元にまとめているため32ページとなっている。また、それぞれの内容が、交互に記載されている。

3-2 幼児期の遊び・日常生活による比較分析結果

次に、保幼小連携の観点から幼児期の遊び、および日常生活との結びつきを意図した記載の有無を分析し

た結果を表2、表3に示す。

表2 各社の幼児期の遊びの掲載の有無

	A	B	C	D	E	F
①幼児期の遊び	◎	○	○	◎	○	◎
どんぐり集め	—	○	—	—	—	○
じゃんけん列車	○	—	—	—	—	—
縄跳び	○	—	—	○	—	—
折り紙	○	—	—	○	○	—
積み木タワー	○	○	○	○	—	○
泥団子・粘土	○	—	—	○	—	—
砂場遊び	○	—	—	—	—	○
鉄棒	—	—	—	—	—	○

*各社の順は、50音順でA啓林、B東書、C大日本、D日文、E教出、F学図である。

表1 各社の領域数、単元名と単元のページ数

出版社	領域数	単元名	ページ	備考
A	2	・わくわく すたあと	2	
		・わくわく がっこう	6	
		①かずと すうじ (数と計算)	10	
		②なんばんめ (数と計算)	6	
		③いくつと いくつ (数と計算)	14	
B	1	④いろいろな かたち (図形)	8	
		・くらべた こと が あるかな	1	「どのように かわるかな」で関数的な考え方
		・おおいのは どちらかな	1	
		①なかまづくりと かず (数と計算)	32	
		②なんばんめ (数と計算)	4	
C	1	・どのように かわるかな	2	
		・なかよし	6	「いくつと いくつ」で関数的な考え方
		①10までの かず (数と計算)	18	
		②なんばんめ (数と計算)	5	
		③いくつと いくつ (数と計算)	8	
D	1	・かずや かたちで たのしく	8	序章が物語であり、図形や測定領域の内容を想起
		・にゅうがく おめでとう	6	
		①10までの かず (数と計算)	18	
		②なんばんめ (数と計算)	4	
		③いくつと いくつ (数と計算)	10	
E	2	・なかよし あつまれ	5	間違い探し時刻
		①いくつかな (数と計算)	16	
		②なんばんめ (数と計算)	6	
		③いま なんじ (測定)	4	
		④いくつと いくつ (数と計算)	10	
F	1	①10までの かず (数と計算)	22	
		②いくつと いくつ (数と計算)	8	
		③なんばんめかな (数と計算)	4	

*各社の順は、50音順でA啓林、B東書、C大日本、D日文、E教出、F学図である。

表2より、すべての出版社において、「幼児期の遊び」を写真や絵で掲載していることがわかる。扱われている遊びは、どんぐり集めやじゃんけん列車、縄跳び、折り紙、積み木タワー、泥団子・粘土、砂場遊び、鉄棒が掲載されている。A社、D社、F社は、2ページ以上にわたって幼児期の遊びが掲載されており、他社は1ページとなっている。そのため、掲載されている遊びの数に違いがあり、最も多様な幼児期の遊びを掲載しているのは、A社であり、D社が次点となっている。A社は、「数と計算」「図形」「測定」の3領域に繋がる遊びを掲載しており、D社は「数と計算」「図形」の2領域に繋がる遊びが掲載されている。

表3 各社の日常生活との繋がり掲載の有無

	A	B	C	D	E	F
②日常生活	◎	○	○	○	◎	—
日付の表示	○	—	—	—	—	—
誕生日の掲示	○	—	—	—	—	—
芋ほり	○	○	○	○	○	—
通学	○	—	○	—	○	—
おやつ分配	—	—	○	—	—	—
雪だるま	—	—	—	—	○	—

*各社の順は、50音順でA啓林、B東書、C大日本、D日文、E教出、F学図である。

表3より、A～E社の5社の出版社において、「②日常生活との繋がり」が写真や絵で掲載されていることがわかる。扱われている日常生活の場面は、日付の表示や誕生日の掲示、通学、芋ほり、おやつ分配、雪だるまが掲載されている。A社とE社は、2ページ以上に日常生活の場面が掲載され、通学の場面が数ページ用いられている。そして、特にA社は、日付や誕生日の掲示といった幼児期の保育室に日常的に見られた写真を掲載している。5社ともに掲載されている日常生活の場面は、秋の時期に頻繁に行われるさつまいも掘りであり、さつまいもの大きさ比べが掲載されている。

4. 考察

記載されている領域数、単元名とページ数の比較分析の結果、スタートカリキュラム用の算数教科書では、領域数が1であり、扱われている単元が「数と計算」のみである出版社が多いことが明らかとなった。A社、E社においては、「図形」「測定」領域が、それ

ぞれ1領域ずつ多く記載されていた。スタートカリキュラムにおいて、第1学年全体の算数科の学習内容をイメージ化することが望ましいとするならば、領域に関しては、より多くの範囲を扱うことが望ましいであろう。別冊を発行している出版社の内A社は、2領域の内容を扱っており、より多くの領域を入学当初に伝えることを可能にしているといえる。しかし、いずれの出版社においても、「データの活用」領域は、扱われていない。小学校学習指導要領では、第1学年の「データの活用」領域の学習内容として、絵グラフのように、個数に着目して簡単な絵や図などに表したり、それらを読み取ったりすることがあげられている。たとえば、「10までの数」の数唱や計数を扱った後で、「どれが いちばん おおい？」のような種類ごとに分類整理する考え方を扱えると考ええる。

そして、単元①「10までの数」と③「いくつといくつ」の記載ページ数が、出版社によって大きく異なることが明らかとなった。ただし、ページ数に違いがあるが、必ずしも多いことがより良い算数教科書というわけではない。挿絵の大きさや計数させる練習ページの有無によって、ページ数が異なっている。幼児期の数の発達に関しては、数唱や計数、数理解、計算、数字の理解など、基本的な数概念の認識が明らかにされており、個人差があるものの年長の6歳児頃では、40以上の数までの数唱や計数が可能であるとされている(横地(1981)、山内ら(1997))。ただし、数の合成・分解は、数唱や計数ほど発達していない(横地(1981)、丸山(2004))。以上の発達は、お店屋さんごっこや日付の確認などのように、幼児期の遊びや日常生活を通して、子ども達が数の概念を発達させているためである。この数の概念の発達を考慮すれば、「10までの数」は、1つずつ丁寧に扱うのではなく、幼児期で学んできたことを子供たちが実感できるように確認していくことが望ましいだろう。そして、「いくつといくつ」については、第1学年の学習目標として、丁寧に扱う必要がある。その際、絵図を計数して考えるのではなく、部分の数を隠して念頭操作によって考えられるようにすることが重要である。

幼児期の遊び・日常生活とのつながりについては、ほぼすべての算数教科書で序章での記載が確認された。保幼小連携の観点が、各社において意識されていると考えられる。掲載されている遊びは、積み木タ

ワーが共通しており、日常生活では芋ほりが頻出していた。しかし、その扱いの程度には違いがあり、幼児期の遊びと日常生活の繋がりを両方2ページ以上扱っているのは、A社のみであった。また、A社は、「数と計算」「図形」「測定」の3領域に繋がる遊びや、日付や誕生日の掲示物によって、30までの数字の読みも、子ども達に実感させることが位置づけられていると考えられる。スタートカリキュラムが提起され、2024年度（令和5年検定済）の第1学年の算数教科書には、あらたに別冊が発行された。その算数教科書の現状では、幼児期の遊びや日常生活との繋がりが確認されるものの、「測定」領域の拡充、「データの活用」領域の追加が改善案として考えられる。例えば、子ども達は、幼児期から身体測定を経験しており、長さや重さを見聞きしている。また、栽培しているアサガオや野菜などの植物から、どれだけ種や実が採れるのか記録する活動も想定される。さらに、「データの活用」領域の記載は、いずれの出版社にも扱われていないが、幼児期から第1学年にかけた発達段階を考慮しながら、記載の可否を検討する必要がある。

5. 研究のまとめと今後の課題

本研究では、保幼小接続の観点を踏まえて、2024年度（令和5年検定済）の第1学年の算数教科書を比較分析し、教科としてのスタートカリキュラムの現状を明らかにし、今後の在り方を検討することを目的とした。比較分析の結果、スタートカリキュラムで使用する算数教科書は、多くの場合学習内容が「数と計算」領域に限られていることが明らかとなった。また、序章においては、ほぼすべての算数教科書において、幼児期の遊びや日常生活を想起させる写真や絵が掲載されており、スムーズな学びの接続を意図していることが見いだされた。しかし、記載される遊びや日常生活の場面、記載される領域数は、出版社によって限られており、小学校算数のイメージを豊かにすることが望ましいとすれば、より多様な領域に触れる単元、より多様な遊びや日常生活の場面が記載される必要性が見いだされた。具体的には、「データの活用」領域の記載は、いずれの出版社にも扱われておらず、幼児期から第1学年にかけた発達段階を考慮しながら、記載の可否を検討する必要がある。

今後の課題としては、保幼小連携の観点に対する教

員の認識や、実際に授業がどのようになされているか明らかにすることがあげられる。また、その結果、子供たちが幼児期の遊びや日常生活の場面の例示から、算数科の学習のイメージ化に繋がっているのかどうかを明らかにすることも課題としてあげられる。つまり、「実施されたカリキュラム」や「達成されたカリキュラム」の観点から考察することが課題となる。

【謝辞】本研究はJSPS科研費 JP19K14346の助成を受けたものである。

【備考】著者は、本研究に関連する利益相反として、株式会社新興出版社啓林館が発行する算数教科書の著作編集関係者であり、投稿日より1年以内に報酬を受理していることを開示する。

【引用・参考文献】

- ・岩崎秀樹・山口武志（2002），算数・数学教科書分析の方法の考察とその適用，日本数学教育学会第35回数学教育論文発表会論文集（口頭発表の部），409-414
- ・金本良通・細水保宏ほか38名（2023），しょうがくさんすう 1，教育出版
- ・北野幸子（2009），「第4部9章 保育実践の改革の動向－実践力向上のために」，北野幸子・角尾和子・荒木紫乃編，『遊び・生活・学びを培う教育保育の方法と技術』，北大路書房，185-194
- ・国立教育政策研究所（2021），『TIMSS2019算数・数学教育／理科教育の国際比較』，明石書店
- ・国立教育政策研究所（2019），『スタートカリキュラム スタートブック』
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf，2024年10月最終確認
- ・小谷宜路（2005），言葉及び交友関係との関連から見た幼児の量に対する感覚，保育学研究43（2），202-213
- ・小山正孝・飯田慎司ほか72名（2023），しょうがくさんすう 1 ①，日本文教出版
- ・榎原知美（2006），幼児の数的発達に対する幼稚園教師の支援と役割－保育活動の自然観察にもとづく検討－，発達心理学研究17（1），50-61
- ・榎原知美（2014），5歳児の数量理解に対する保育者の援助－幼稚園での自然観察にもとづく検討－，保育学研究52（1），19-30

- ・清水美憲 (2020), 学校数学カリキュラムにおけるアライメントを検証するための理論的枠組みの構築, 日本数学教育学会第53回秋期研究大会論文集 (口頭発表の部), 89-92
- ・清水宏幸・川添充・岩田耕司・清水美憲 (2021), 教科書の分析による学校数学カリキュラムの把握, 日本数学教育学会 第9回春期研究大会論文集 学会指定課題研究の部, 239-246
- ・清水美憲・真島秀行ほか102名 (2023), 新編あたらしいさんすう ①はじめよう!さんすう, 東京書籍
- ・相馬一彦・橋本吉彦ほか45名 (2023), 新版たのしいさんすう 1ねん①, 大日本図書
- ・寺垣内政一・根上生也・矢部敏昭・清水静海ほか205名 (2023), わくわくさんすう すたあとぶつく, 新興出版社啓林館
- ・長崎栄三・西村圭一・二宮裕之 (2015), 国際的な視野から見た算数・数学教科書の研究・開発ー算数・数学教科書の研究と開発に関する国際会議 (ICMT2014) からー, 日本数学教育学会誌97巻5号, 11-20
- ・一松信ほか77名 (2023), みんなとまなぶしょうがっこうさんすう 1ねん上, 学校図書
- ・福田博人・紙本裕一 (2019), 日本の統計教育における教科書の問題分析による校種間比較ー文脈を視点としてー, 科学教育研究, Vol.43 No.4, 362-372
- ・横誠司・堀田龍也 (2016), 我が国の算数科の教科書における統計的リテラシー項目の分類による比較検討, 教育情報研究, 第32巻第1号, 27-36
- ・丸山良平 (2004), 「幼児が集合による数の合成・分解で使用する方略の実態」, 上越教育大学研究紀要, 第24巻, 第1号, 257-270
- ・文部科学省 (2018), 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説: 算数編, 日本文教出版社
- ・文部科学省 (2021), 「教科書制度の概要」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901.htm, 2024年10月最終確認
- ・矢野博之 (2012), 教科書を研究することー教科書分析の枠組みと方法ー, 音楽教育実践ジャーナル, vol.9 no.2, 6-13
- ・山内昭道・松本尚子・安齊智子 (1997), 「幼児期の数概念形成についての研究 第1報 問題の所在と数唱と計数の調査研究」, 東京家政大学研究紀要, 第37集, 第1号, 197-204
- ・山内昭道・松本尚子・安齊智子 (1998), 「幼児期の数概念形成についての研究 第2報 幼稚園と保育園の幼児の比較」, 東京家政大学研究紀要, 第38集, 第1号, 109-117
- ・横地清 (1981), 「IV部 年間計画と保育」, 『幼稚園・保育園 保育百科 1歳児から5歳児までの保育』, 明治図書, 309-534
- ・渡辺能理夫 (2011), 「教科書研究の例」, 第60回全国社会科教育学会全国研究大会フォーラム資料

(2024年10月11日受稿, 2024年11月22日受理)

A Comparative Analysis of Arithmetic Textbooks from the Perspective of Preschool–Elementary School Transition: Differences in Domains, Educational Content, and Presentation Methods

OHTA Naoki⁽¹⁾

The purpose of this study was to clarify the current state of the start curriculum and to consider the future of the start curriculum by comparing the first-grade arithmetic textbooks in 2024 from the perspective of the connection between preschool and elementary schools.

As a result of the comparative analysis, it became clear that in most cases, the content of the mathematics textbooks used in the starting curriculum was limited to the area of “number and calculation”. Furthermore, in the introduction, it was found that almost all of the math textbooks included pictures and drawings that evoked play and daily life in early childhood, with the intention of providing a smooth connection to learning. However, the number of plays, daily life scenes and areas described was limited by the publishers. If it is desirable to develop an image of primary school math, it was found necessary to include units dealing with a wider variety of areas and scenes of play and daily life.

Keywords : Arithmetic Textbooks, Preschool-Elementary School Transition, Start Curriculum, Early Childhood Play

⁽¹⁾Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University